

「人が集う場所になるために -斎藤清美術館によるアートアクティビティの構築-」
会津大学短期大学部/葉山ゼミ×柳津町×やないづ町立斎藤清美術館

課題

柳津町営の斎藤清美術館では、地域における芸術文化の発信拠点として美術の楽しさを伝えることをコンセプトの1つとし、ワークショップやアートイベントを実施している。
これまでは主に地域おこし協力隊の活動として拡充してきたが、今後地域おこし協力隊が不在になっても、地域住民や大学等と協力して持続的な取組とする方法を検討する。

調査研究手法

現地視察とミーティングを踏まえ、目的を達成するためにいくつかの実践を検討した。第一にこれまでゼミ活動をとって行ってきた造形ワークショップを斎藤清美術館でも実施することとした。
特に斎藤清氏の作品で使用される版表現を扱うもの、また奥会津の地域文化を体験できるもの、体感できるものを想定している。斎藤清美術館ならではの利を活かすことで、この地ならではの芸術文化の発信ができると考えた

結果・分析

本研究として今年度4回のワークショップを実施した。9/29には紅葉をモチーフとしたスタンプ制作のワークショップ、12/1には柳津町の杉の枝木を使用した秘密基地作り、2/1と3/23には斎藤清氏の猫の版画をモチーフとしたスタンプキットを教具として納品して使用したワークショップを実施した。どの実践においても参加者とじっくりと関りながら制作体験を提供することができ、これらのワークショップが人流を盛んにさせることの契機となることができた。
いずれのワークショップも制作した作品や教具を実施後も継続的に展示したり使用できる環境を維持したことで、ワークショップを行わない期間にもそれらの使用や展示物の発展がみられ、そこに人が常駐しなくとも人が集う場所となるための機能を果たすことができた。
また研究課題に対しては副産物であるが、各ワークショップでじっくりと参加者と関わったこと、そして継続的に参加する中で成果を視認できる展示物等があることによって、参加した学生の充足感が非常に高い研究となった。

提言施策

今年度取り組んだワークショップと教具の制作によって、当初の課題に対しては凡そ達成できたと考える。斎藤清美術館の規模感で、立地環境だからこそできる、都市部にはできない実践経験や場との関りを得られることも実感するものであった。今後についても継続的に斎藤清美術館との連携を検討している。その後の発展として、継続して参加する参加者は参加者に留まらず、キッズスタッフとして登用するなど、ただ体験できる場としての美術館ではなく、実践者の立場も学び経験できる美術館への成長を目論む。このような発展は地域の美術館だからこそ実現を想定しうるものであり、柳津町のコミュニティならではの発展を検討するものである。